



おわりに



IV どのように実行すればよいのでしょうか

ここまで、様々な振興策を提案させていただきましたが、振興策の内容と同じく大切なのが、「どのように実行するか」という点です。提案をしても、それが実行されなければ、全く無意味のものになってしまうからです。そこで、実行のあり方についても、少し触れておきたいと思います。

できることから取り組みましょう

冒頭にも書きましたとおり、業界による古酒の積極的な展開や『泡盛同好会』などの普及のための取り組みは、引き続き頑張りたいと考えています。その一方で、この報告書で提案した取り組みを新たに行っていくことにより、沖縄県産酒の更なる振興が図れると思われまます。

この報告書の提案は、「沖縄のお酒を知ってもらう」「沖縄のお酒を味わってもらう」「沖縄への親しみを深めてもらう」という三つの視点で構成されています。それぞれの視点の取り組みは深く関係しているため、この報告書の取り組みをどれか一つやればよいというものではありません。それぞれの視点でできることから一つずつ取り組んでいくことが求められます。

「誰が取り組むか」ではなく、全ての人で取り組みましょう

これらの取り組みは、お酒の振興についての取り組みなので、酒類業界の方々に担っていただくことは、もちろん期待されています。ただし、先にも書きましたように、県民一人ひとりの方に愛されて初めて大きな力が生まれると思いますので、県民全体で推進することが大切です。県民一人ひとりの方が、沖縄のお酒を自信をもって味わい、また県外の方に薦めることで、県外から見ても沖縄のお酒にパワーを感じることができるとおもいます。

そのような発想からすれば、行政機関が果たすべき役割も自ずと出てきます。酒類振興に関する日常的な普及活動はもとより、この報告書で提案した取り組みについても、行政がイニシアティブを取れるものについては積極的に取り組み、業界と二人三脚で進めていく必要があるでしょう。

県民のみなさまへ。この機会に、是非、沖縄の食文化とお酒をもう一度見直し、愛着を感じていただきたいと考えます。県外の方は、沖縄で沖縄のお酒が親しまれ、文化・生活に深く溶け込んでいることにこそ感銘を覚えます。沖縄のお酒の魅力を見つめなおし、発展させていくのは、県民のみなさまに他ならないと思います。このような県民のみなさまの思いが、県外、ひいては海外に沖縄のお酒の愛好者が増えていくための原動力となるのではないのでしょうか。その意味でも、県民のみなさまには、日頃から意識して沖縄のお酒や料理を味わっていただき、県外から来たお客様にも薦めていただくと共に、県外へ行かれる際には、是非、沖縄のお酒をお土産に選んでいただければと思います。

『沖縄県産酒類振興・消費拡大懇話会』について



『沖縄県産酒類振興・消費拡大懇話会』は、沖縄の産業振興における酒類製造業の重要性を踏まえ、沖縄県産酒類の更なる振興を図るための方策について話し合う会議です。平成18年末のイベント『沖縄のお酒を語ろう会』の後、平成19年1月から3月にかけて、3回の会議を行いました。

この懇話会では、県産酒類の県外出荷の拡大策も大きな柱として議論して頂くため、沖縄県内の有識者に加え、本土で活躍されている有識者にも委員となって頂きました。その結果、これまでに議論されることの少なかった本土からの新しい視点に立った御提案もたくさん頂くことができました。

(メンバー:50音順、敬称略)

- 佐々木信行(セコム(株)専務取締役)
- 残間里江子(プロデューサー)
- 尚 弘子 (琉球大学名誉教授(座長))
- 田崎真也 (ソムリエ('95世界最優秀ソムリエコンクール優勝))
- 富永麻子 (泡盛ルポライター '99泡盛の女王)
- 比嘉京子 (琉球放送報道局報道部部長)
- 比嘉良雄 (興南学園理事長、元・オリオンビール(株)副社長)
- 三上重明 (独立行政法人酒類総合研究所醸造技術基盤研究部門長)
- 百瀬恵夫 (明治大学名誉教授)